

今朝から使徒パウロの生涯を見ていきます。まずは第一伝道旅行までを学んでいきます。今朝はパウロの回心の記事です。

1. ダマスコ途上 (1～3節)

①殺意に燃え (1)「さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、」

サウロというのは、パウロのヘブル名で、パウロはローマの市民権を持つ彼が用いていました。そのサウロは 8章の1～4節にあるように、ステパノを殺すことに賛成していました。また、教会を荒らし、家々に入って、男も女も引きずり出し、次々に牢に入れていました。そして、この章に至って、主の弟子たちに対する脅かしや、殺害の計画の気概に燃えて、大祭司の所に行きました。大祭司はユダヤ人議会の議長であり、ローマ政府の下に逮捕許可などの権限が与えられていました。

②大祭司への許可願い (2)「ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるように頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いてくるためであった。」

サウロが大祭司に依頼した内容は、大きな町ダマスコにある諸会堂宛てに、手紙を書いてくれるように頼んだのです。そして、その内容というのは、もしキリストを信じる者を見つければ、男、女を問わず、見つけ次第に縛り上げエルサレムに連れてこられるというものでした。

③天からの光 (3)「ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。」

さて、サウロはダマスコにクリスチャンに対する逮捕などの許可を得、気概に燃えて、もうダマスコの町に入ろうとする所までやって来ました。すると、突然に超自然的なまばゆいばかりの光が彼を巡り照らしました。明らかに、サウロへの直接に関わる光でした。

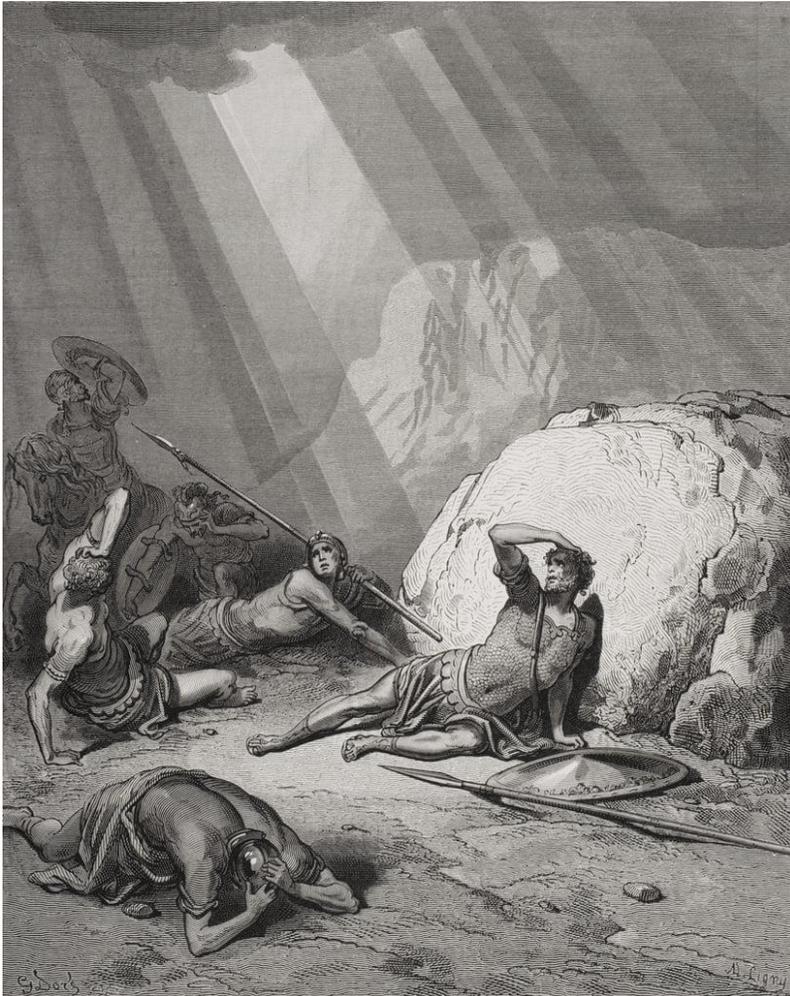
2. 主イエスとの出会い (4～6節)

①天からの声 (4)「彼は地に倒れて、『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。』という声を聞いた。」

サウロは地に倒れました。それほどに衝撃的な光だったのです。すると、サウロにアラム語でお言葉がありました。『サウロ、サウロ。なぜ私を迫害するのですか。』これは、サウロだけにしか、聞こえないお言葉でした。彼にとっては全く思い当たる節がない声でした。ただ、その御声は権威に溢れていたことだけは間違いありません。

②イエスのお答え (5)「彼が、『主よ。あなたはどなたですか。』と言うと、お答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』」

サウロは思わず、『主よ』と呼びかけました。そして、『あなたはどなたですか。』と尋ねました。すると、『わたしは、あなたが迫害しているイエスである』という、思いがけない返事を受けたのです。サウロも彼なりに、主なる神のために、ク



リスチャンを迫害してきたつもりでした。ところが、自分が迫害しているのは『主』御自身だということです。この短い対話の出来事が、サウロの主イエスとの出会いであり、回心のドラマでした。

③ご命令 (6)「立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならぬことが告げられるはずです。」

主は、『立ち上がって、町(ダマスコ)に入りなさい。そうすれば、あなたの、なすべきことが告げられる』と語られました。これは、サウロにとっては明らかに、「主」からのお言葉でした。従うだけのことでした

### 3. ダマスコに連れて行かれ (7~9 節)

①同行の人達 (7)「同行していた人たちは、声は聞こえても、だれも見えないので、ものも言えず立っていた。」

サウロが主との対話をしている時、同行していた人たちの耳には、その声が届いていました。しかし、パウロが主イエスと人格的出会いをしているさ中であっても、何も言えずに立っているだけでした。

②手を引かれて (8)「サウロは地面から立ち上がったが、目を開いていても何も見えなかった。そこで人々は彼の手を引いて、ダマスコに連れて行った。」

一方、地に倒れたサウロは地面から立ち上がったのですが、目を開いていても何も見えないという状態でした。それは、キリストと出会いましたが、彼はそのことの意味を知る必要があったのです。周りにいる人々が、彼の手を引いてダマスコに連れて行くしかありませんでした。

③三日も目が見えず (9)「彼は三日の間、目が見えず、また飲み食いもしなかった」。

サウロは三日間、目が見えませんでした。また、飲み食いもしませんでした。目が見えないという試練のなかに、サウロが主の前に黙想し、理解し、自覚、決断していったことこそが、サウロのその後の宣教人生にとって、大きな意味を持っていたといえましょう。

### 《結論》

使徒パウロはキリスト教の宣教と教理において、極めて重要な働きをした人物です。

そこで、まずはパウロがキリストに出会う経緯を見て行きましょう。

使徒パウロは、使徒の働き 22 章において、千人隊長の許しを得て、人々に証をしています。また、26 章においては、アグリッパ王の前でも立証しています。彼は学問の都であるタルソ生まれのユダヤ人でした。その宗教の最も厳格な派に従い、パリサイ人として生活していました。律法についてはガブリエルに厳格な教育を受けました。そして、クリスチャンに対しては強硬に敵対すべきと考え、彼らを迫害し、国外の町々まで追跡していました。そして、祭司長の許可を得て、ダマスコでも彼らを処罰するつもりでした。今朝読んだ出来事につながります。ダマスコ途上で、「正午ごろ、王よ、私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と同行者達とを

照らしたのです。」(26:13)とある通りです。ここでパウロは「主よ」と言い、キリストと出会い、回心を経験することになります。それが彼の人生の分岐点でした。その後の歩みを見れば明らかです。ここから言えることは、彼が救われたのは、ただ主の一方的な恵みであるということです。なぜなら、彼には行いにおいては、救いに導かれる功(いさお)は全くないのです。むしろ、マイナス点ばかりです。なにしろ、キリスト教徒を迫害する急先鋒だったからです。そんなパウロに主は働きかけられたのです。だからこそ、パウロの救済論は、恵みのみに徹しているのです。逆にいえば、それほどにダマスコ途上の出来事はキリスト教の教理形成において重要であったといえます。

もう一つ見ていかねばならないことがあります。

それは、彼があのようなまばゆいほどの光を受け、キリストに出会った後に、三日間目が見えなくなったということです。見えなくさせられたと言っても良いでしょう。その三日間において、サウロはそれまでの人生を顧みたことでしょう。そして、ダマスコ途上でキリストに出会ったことを振り返り、彼が信じる神は自分に何を語り、いかに導かれようとしているのかも考えたことでしょう。飲み食いもしないほどに、集中して主を想い、御心を求めたことでしょう。それは、イエス・キリストが宣教前に 40 日の断食をして祈りをしたことに重なります(マタイ 4 章)。サウロは未だ宣教について、明確なビジョンはなかったでしょうが、キリストが主であることを確認し、この方をお伝えすることに自らの残りの生涯をささげる思いへと導かれる大切な霊想の時であったと思われる。

この国にも、回心して人生の大転換をした例があります。亀谷凌雲(かめがいらいうん)牧師(1888~1973 年)は富山県新庄町の浄土真宗の寺の家に生まれました。父親が 17 代目。凌雲師も僧侶の道に進み、さらに研鑽のため、東京帝大では宗教学をも専攻しました。その宗教心は純粋で、真理を真っすぐに求める人でした。真理追究のためには、他宗教の講演などにも耳を傾けました。金森通倫牧師などには大分惹かれたようです。そして、聖書も深く読みました。彼は浄土真宗において凡夫が救われるのには、阿弥陀如来にすがらしかないと教えることに納得していました。しかし、如来とは誰なのかがわかりません。一方、聖書を読むうちに、キリストの存在にとらえられていきます。結果として、神である方が人となられたイエス・キリストをこそ生ける救い主であると認め、信じます。亀谷師は聖書を通してキリストと出会っていきました。その後、神学校で学び、郷里伝道へと進み、教会を建て上げました。亀谷師の立証は「仏教から基督へ」に詳しく述べられています。

パウロや亀谷牧師のような、劇的回心がある一方、素朴な入信もあります。献品された「証し」という本には多くのそうしたあかしが掲載されています。

キリストによって救われた者たちは、自らの罪のために、キリストが身代わりとなって十字架に上り死んでくださったことを信じています。また、その方がよみがえってくださったことも信じています。それがいかに素朴であっても、神の前に起こされたのであれば真実な出来事です。それをそのまま伝えることが「証し」です。改めてそれを黙想し、自らが救いに導かれたことを確認していきましょう。私たち一人一人の伝道が、人々に光をもたらす、結果的に国家間の問題、犯罪、不正などの解決の糸口となるのです。パウロがダマスコ途上の出来事を、事あるごとに伝えたように、私たちも証しを続けていこうではありませんか。